『異邦人』における海のイメージ

松　本　陽　正

序

アルベール・カミュにおける海のイメージについては、従来よりかなり多くの言及がなされてきた。たとえば、ヴィジアニが、「海 (la mer) と太陽は、おそらくは無意識的なものかもしれないが、カミュの心の中では、母 (la mère) と父に緊密に結びついている」[1] とし、「カミュにおける海は、母の属性、すなわち豊饒 (fertilité)、生 (vie)、自由 (liberté)、愛 (amour)、性 (sexualité)、再生 (régénération) を有しているが、死 (mort) を表してもいる」[2] と述べ、「海」と「母」とを結びつけ、そこにさまざまな象徴をみたのは、その典型的な例だろう。ただ、『異邦人』に即していえば、ヴィジアニの言う「豊饒」から「再生」までが「母の属性」といえるかどうかはともかく、海のイメージは「母」とか「自由」とかいった形で限定的に指摘されてはきたものの、それが体系化されて論じられることはなかったように思われる。

「海」はカミュ自身が「好きな10の言葉」[3] の一つにあげている言葉だし、「太陽」とともに、「何よりも地中海人」[4] であった「カミュの作品において恒常的で支配的な象徴」[5] となっているものであり、カミュの全作品における海のイメージの変遷を辿ることは興味深いテーマといえよう。本稿では、その序章といった形で、対象作品を『異邦人』に限定し、論をすすめたい。そして、従来の研究成果を踏まえつつ、「海」という語の使用頻度といった観点から海のテーマの重要性を指摘した後、具体例を追いつつ、さらにはこの作品に見受けられる太陽のイメージとの比較を通して、『異邦人』における海のイメージを探ることとする。そうすることによって、ヴィジアニのいうすべての要素が『異邦

人』にも認められるか否かを検証し、認められた要素についてはその濃淡を辿りながら、『異邦人』における海の支配的なイメージを明らかにしたい。我々はすでにさまざまな角度から『異邦人』を検討してきたが[6]、海のイメージから接近することによって、本稿はまた、将来の課題である『異邦人』の全体像への、新たな角度からの一照明ともなるであろう。

1

M.-G. バリエは『異邦人』第Ⅰ部において多用されている名詞の使用頻度数を示すとともに、比較対照させる形で、それらの語の『チパザでの結婚』（『結婚』所収）での使用頻度数もあげたリストを作成しているが、その中の名詞の項目を部分的に引用してみよう[7]。

名　　詞		『異邦人』第Ⅰ部	『チパザでの結婚』
太　陽	soleil	37	14
空	ciel	20	8
水	eau	19	4
海	mer	15	19
目	yeux	15	3
音	bruit	12	?
夕　べ	soir	11	?
光	lumière	11	3

すぐ目につくのは、「太陽」という語の使用頻度の高さだろう。二番目の「空」、三番目の「水」の倍近い数にのぼっている。さらに、太陽の属性および太陽と関連深いイメージを持つ語、すなわち「光」「空」などもかなり多用されている。この件については以前論じたことがあるが[8]、ここで注目したいのは「海」である。使用数では「太陽」の半分にも満たないが、それでも四番目に位置している。かなりの数にのぼるといわねばなるまい。ところで、『チパザでの結婚』では、「海」は「太陽」を圧して、最も多く用いられていた言葉であった。もちろん『異邦人』と『チパザでの結婚』が同一の世界を形成しているなどと

言うつもりはないが、それにしても、なぜ『異邦人』第Ⅰ部では、「海」は「太陽」の半分にも満たぬ数になったのだろうか。まず考えられるのは、『異邦人』においては、主人公の殺人を「太陽のせい」(p. 1198) にするために、故意に「太陽」が多用された点である。したがって、「海」という語は、相対的に抑制されたと考えられるのである。『異邦人』第Ⅰ部は6つの章から成り立っているが、「海」という言葉は、1章と3章で一度使われている他は、すべて6章に集中していて、たとえば、後で見る水浴の描かれている2章や4章では使用されていないのである。その代わりに用いられているのが、「水」である。『チパザでの結婚』での使用例は少なかったこの言葉は、『異邦人』第Ⅰ部になると「海」以上に頻出してくる。しかも、注目すべきは、『異邦人』第Ⅰ部において用いられている「水」がほとんど常に「海の水」を指している点である[9]。このことを考えあわすなら、『異邦人』第Ⅰ部においては、『チパザでの結婚』同様、「海」に関係する語が「太陽」に関係する語とともに、圧倒的な頻度数で用いられており、それらの言葉がキーワード的な役割を果たしていることが了解されるだろう。

2

それでは「海」にはいかなるイメージが認められるのだろうか？

6章構成をとる『異邦人』第Ⅰ部には、三度にわたって、しかもきわめて巧妙に偶数の章に、水浴の場面が描かれている。主人公ムルソーは、水浴を愛し、海が与えてくれる生の喜びを享受している。埋葬から帰った翌日、所在無さに、ムルソーは泳ぎにいくことにするし[10]、第6章、問題の日曜日には、少しでも早く泳ぎたい一心から朝食をとらないほどである[11]。水浴が与えてくれる喜びを汲みつくそうとする態度は貪欲である。太陽によって体が温められ、体全体が水を希求するようになるまで、彼は水への欲望を押さえつけるほどである[12]。

[...] Marie s'est immédiatement jetée dans l'eau. [...] j'étais occupé

à éprouver que le soleil me faisait du bien. Le sable commençait à chauffer sous les pieds. J'ai retardé encore l'envie que j'avais de l'eau, mais j'ai fini par dire à Masson: 《On y va?》 (p. 1162)

そして、これに続く水浴の喜びを彼は次のように讃っている。

L'eau était froide et j'étais content de nager. Avec Marie, nous nous sommes éloignés et nous nous sentions d'accord dans nos gestes et dans notre contentement. (p. 1162)

「生」の喜びを与えてくれるのは、なにも水浴だけとは限らない。ムルソーの勤める会社は「海に面して」(p. 1143) いるが、仕事を終えた「夕方、外に出て、岸に沿ってゆっくり歩いて帰るのが楽しかった」(le soir, en sortant, j'ai été heureux de revenir en marchant lentement le long des quais. p. 1144) と彼は打ち明けてもいるのである。

このように、海はなによりも主人公に「生」の喜びを、幸福感を与えてくれる場なのであり、まず指摘しておきたいのは、『異邦人』における海には「生」のイメージが認められる点である。

3

では、その他にどんなイメージが認められるのだろうか？

「海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がゐる。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある」と「海」と「母」の結びつきを歌ったのは三好達治だし、ヴィジアニやさらには多くの研究者がカミュにおける「海」と「母」の結びつきを指摘しているが[13]、厳密に言えば、『異邦人』にみられる海には、「母」ではなく、「女性」やさらには性的なイメージが認められるのである。この点で、ムルソーが、恋人となるマリーと海の中で再会するのは示唆に富んでいる。

J'ai pris le tram pour aller à l'établissement de bains de port. Là, j'ai plongé dans la passe. Il y avait beaucoup de jeunes gens. J'ai retrouvé dans l'eau Marie Cardona, une ancienne dactylo de mon bureau dont j'avais eu envie à l'époque. (p. 1138)

そしてマリーとの水浴、水の中での戯れは、ムルソーにとって、性的交渉の序曲となるものだ[14]。上にあげた引用文に続く件をあげておこう。

Je l'ai aidée à monter sur une bouée et, dans ce mouvement, j'ai effleuré ses seins. [...] Je me suis hissé à côté d'elle sur la bouée. Il faisait bon et comme en plaisantant, j'ai laissé aller ma tête en arrière et je l'ai posée sur son ventre. [...] Sous ma nuque, je sentais le ventre de Marie battre doucement. Nous sommes restés longtemps sur la bouée, à moitié endormis. Quand le soleil est devenu trop fort, elle a plongé et je l'ai suivie. Je l'ai rattrapée, j'ai passé ma main autour de sa taille et nous avons nagé ensemble. (pp. 1138-1139)

この後、ムルソーはマリーと喜劇映画を見にゆき、ベッドを共にし、性的関係を結ぶこととなるのであった。

すでに述べたように、水浴の場面は、6章構成のI部のうち3つの章に描かれているが、残る2つの章、すなわち、4章と6章にみられる水浴もマリーが一緒である。『異邦人』に見受けられる水浴は、ムルソー一人でおこなうのではなく、そこには常にマリーがいて[15]性的交渉の序曲となっていることには、注目しておく必要があろう。少し長くなるが、その例をあげておこう。まず、4章から。

Mais au bout de quelque temps, j'avais la bouche brûlée par l'amertume du sel. Marie m'a rejoint alors et s'est collée à moi dans l'eau.

Elle a mis sa bouche contre la mienne. Sa langue rafraîchissait mes lèvres et nous nous sommes roulés dans les vagues pendant un moment.

Quand nous nous sommes rhabillés sur la plage, Marie me regardait avec des yeux brillants. Je l'ai embrassée. A partir de ce moment, nous n'avons plus parlé. Je l'ai tenue contre moi et nous avons été pressés de trouver un autobus, de rentrer, d'aller chez moi et de nous jeter sur mon lit. J'avais laissé ma fenêtre ouverte et c'était bon de sentir la nuit d'été couler sur nos corps bruns. (pp. 1150-1151)

続いて6章。

Marie a voulu que nous nagions ensemble. Je me suis mis derrière elle pour la prendre par la taille et elle avançait à la force des bras pendant que je l'aidais en battant des pieds. [...] Je me suis levé tout de suite parce que j'avais faim, mais Marie m'a dit que je ne l'avais pas embrassée depuis ce matin. C'était vrai et pourtant j'en avais envie. 《Viens dans l'eau》, m'a-t-elle dit. Nous avons couru pour nous étaler dans les premières petites vagues. Nous avons fait quelques brasses et elle s'est collée contre moi. J'ai senti ses jambes autour des miennes et je l'ai désirée. (pp. 1162-1163)

このように、若い二人の海の中での戯れは、常に肉体交渉の前戯となっているのである。こうして、海は「女性」（＝マリー）や「性」と結びつく[16]。こうした点からも、マリーが去った後、「長枕の中に、マリーの髪の毛が残した塩の香りを求め」(p. 1139) るムルソーの姿は示唆的である。ムルソーにとって、マリーは海と繋がっているのである。

4

『異邦人』の第Ⅰ部と第Ⅱ部とは極めて対照的な構成をとっていることはよく知られている。分量的にはほぼ同じだが、第Ⅰ部では18日間の出来事が日記の体裁を装って書き留められているのに対し、第Ⅱ部では、ほぼ1年間の事柄が回想的に叙述されることとなる[17]。また、全体的にみれば第Ⅰ部は太陽と海に象徴される、開かれた、光の世界であるのに対し、第Ⅱ部は、裁判所への往復、囚人護送車に乗り込む短い時間を別にすれば、すべて牢獄か法廷が舞台となっており、閉じられた、その意味では闇の世界を現出している[18]。換言すれば、第Ⅰ部には自由人ムルソーが描かれているのに対し、第Ⅱ部では、囚人ムルソーが描かれているのである。

投獄された当初、ムルソーは自由人としての意識を持ちながら生きている。「実際、最初のうちは、現実に刑務所にいたとはいえなかった」とムルソーは打ち明けている。というのも、「漠然と何かの新しい出来事を期待していた」からである。そんなムルソーが、自由人としての考えを放棄するのは、「マリーの最初にして、最後の訪問を受けてから後」、マリーから「妻ではないから、もう面会の許可はおりないだろう」 (p. 1177) との手紙を受け取ってからである。以後、主人公は囚人として生きることを甘受しようと決心するのだが、とはいえ彼は「自由人の考え方」をなかなか捨てきれず、苦しむことになる。

> Au début de ma détention, pourtant, ce qui a été le plus dur, c'est que j'avais des pensées d'homme libre. (p. 1180)

これに続いて、「自由人の考え方」の具体例を一つだけあげているが、それは、自己の肉体と海との接触に他ならない。すなわち、投獄され、自由を奪われたムルソーに蘇る「自由」とは、まず海によって形象化されるものなのである。

Par exemple, l'envie me prenait d'être sur une plage et de descendre vers la mer. A imaginer le bruit des premières vagues sous la plante de mes pieds, l'entrée du corps dans l'eau et la délivrance que j'y trouvais, je sentais tout d'un coup combien les murs de ma prison étaient rapprochés. (p. 1180)

このように、自由を奪われた獄中のムルソーには、海は「自由」や「解放感」(délivrance) の象徴となってくるのである[19]。

こうした点で、囚人としての生活にすっかり順応して日々を生きる、予審期間中のムルソーが過ごす牢獄から、海が見えている点は示唆に富む。まだ判決が下される以前のこの時期、希望が、自由な世界への帰還という希望が残されていたことを、小窓から見える海が象徴的に示しているからである。

La prison était tout en haut de la ville et, par une petite fenêtre, je pouvais voir la mer. (p. 1177)[20]

裁判の結果、死刑判決が下され、独房を移される。そこからは、もう海は見えない。

On m'a changé de cellule. De celle-ci, lorsque je suis allongé, je vois le ciel et je ne vois que lui. (p. 1202)[21]

「自由」の象徴である海の見えぬ独房への移送が、決定的な判決が下され、以後ただ死を待つだけの主人公の状況の変化を極めて暗示的に示しているといえよう。

5

ここで、『異邦人』に見受けられる海の比喩的イメージについて触れておこ

う。作品中には、海や水に関するかなりの比喩表現がある。たとえば、すでに引用した「夏の夜気が、われわれの褐色の体の上を流れてゆく——その感じは快かった」といったように若い二人の幸福感を満たす夜気を流動体のイメージで表現した例などがみつかるが[22]、なかでも興味深いのは作品の結末部、司祭に対し反抗の叫びをあげた後の、最終パラグラフの比喩的用法である。

> Je crois que j'ai dormi parce que je me suis réveillé avec des étoiles sur le visage. Des bruits de campagne montaient jusqu'à moi. Des odeurs de nuit, de terre et de sel rafraîchissaient mes tempes. La merveilleuse paix de cet été endormi entrait en moi comme une marée. A ce moment, et à la limite de la nuit, des sirènes ont hurlé. Elles annonçaient des départs pour un monde qui maintenant m'était à jamais indifférent. Pour la première fois depuis bien longtemps, j'ai pensé à maman. (p. 1211)

ムルソーは「この眠れる夏のすばらしい平和が、潮のように」自己の内部にしみ入ってくるのを感じる。静謐な、心からの喜びが、「潮」によって、見事に表現されている。「このとき、夜のはずれで」、汽笛がなる。出航間際の船の汽笛だろう。従って、それは、いまやムルソーとは「永遠に無関係になった一つの世界への出発を告げ」るものではあるが、同時にこの汽笛はムルソーを新たな生への出発へと駆り立てることともなる。これに続いてムルソーは、「ほんとに久しぶりに」母を思う。死刑を宣告され死を待つだけのムルソーは、養老院で死を待つ身でありながらも「許嫁」を持ち、「もう一度生き直そう」とした母を理解し、自己もまた「もう一度生き直そう」と心に決めるのである。そうして、ムルソーは「世界の優しい無関心に心をひら」き、「自分が幸福だったし、今もなお幸福であることを」(p. 1211) 悟るのである。このように、ヴィジアニのいう「再生」の決意、幸福の自覚に至る心の軌跡が、「潮」や「汽笛」で見事に表現されているのである[23]。

6

このように、『異邦人』にみられる海は、「生」「女性」「性」「自由」さらには「再生」といったイメージを、一言で言えば「生」のイメージを帯びている。『異邦人』における太陽には、「生」と「死」というまったく両義的なイメージが託されていることはすでに論じたことがあるが[24]、この太陽のような二重性は認められないとはいえ、海がまったく「死」の影を帯びていないわけではない。

「生」の讃歌ともいえるマリーとの水浴の場面が描かれていたのは第Ⅰ部2章、4章、それに6章の前半であったが、その幸せな場面を挟む形で、1章（埋葬の場面）と6章（浜辺への散歩の場面）に「死」の太陽が顔を覗かせることになる。この二つの場面では、太陽は「火」となって、古代人の考えた自然界の他の三要素（土・水・空気）を圧倒し、それらを支配し、「世界」そのものと化すのである。1章では舞台がマランゴということもあって、海が具体的に描かれることはなかったが、6章になると、主人公の幸福の源だった海（＝水）とて例外ではなく、太陽（＝火）に圧倒され、支配されることとなる。太陽は、そのきらめきによって海を、その暑気によって大地や大気を満たしていく。三人（主人公、レエモン、マソン）の散歩の場面から具体例を拾ってみよう。

> Le soleil tombait presque d'aplomb sur le sable et son éclat sur la mer était insoutenable. [...] On respirait à peine dans la chaleur de pierre qui montait du sol. (pp. 1163-1164)

レエモンと二人で外出する場面では、同様のイメージが一段と激しくなって姿をみせてくる。

> Le soleil était maintenant écrasant. Il se brisait en morceaux sur le sable et sur la mer. (p. 1165)

主人公が一人泉に引き返す場面になると、太陽は一層強烈に自然界の他の要素を圧倒することとなる。激しく照りつける太陽を受けた海は、太陽の熱、その光のために、さながら断末魔の苦しみに喘いでいるかのようだ。

> C'était le même éclatement rouge. Sur le sable, la mer haletait de toute la respiration rapide et étouffée de ses petites vagues. (p. 1167)

太陽に支配され、その「錨を投げ」こまれた海は、「沸き立つ金属みたいな大洋」(p. 1167) となる。殺人の直前になると、海も空も太陽と化してしまったかのようである。

> La mer a charrié un souffle épais et ardent. Il m'a semblé que le ciel s'ouvrait sur toute son étendue pour laisser pleuvoir du feu. Tout mon être s'est tendu et j'ai crispé ma main sur le revolver. (p. 1168)

こうして、ムルソーは引き金を引き、アラブ人を殺してしまうこととなる。主人公の殺人は、むろん「太陽のせい」だが、ムルソーの幸福の源だった海もまた太陽に支配され、主人公を不可避的に殺人へと駆り立てていくのである。

II部に入り、予審で殺人の状況について質問を受けた主人公に浮かぶのは、血の色に染められた赤い浜辺だ。

> Une fois de plus, j'ai revu la plage rouge et j'ai senti sur mon front la brûlure du soleil. (p. 1174)

このように、『異邦人』における海には「生」のイメージだけではなくて、主人公を惨劇へと向かわせる「死」のイメージも見受けられる[25]。しかしながら、繰り返すが、このイメージはさほど強いものではない[26]。主調はあくまで

も「生」のイメージであって、この作品において太陽が描きだしていたような「生」と「死」の鮮やかな二重のイメージは、海には認められないと言わねばならない。

結びにかえて

以上みてきたように、『異邦人』における海には、これまでとかく言われてきたような「母」との直接的な結びつきはみられない。しかしながら、ヴィジアニが「母の属性」としてあげた要素の多くが認められた。すなわち、「生」、「性」、「自由」、「再生」がそれである。「死」のイメージも認められなくはなかったが、主調音は「生」のイメージであった。

ここで一つ着目しておきたい点がある。それは『異邦人』における海は、さらに言えば不条理の系列のすべての作品群における海も、それが描かれているにせよ、そうでないにせよ、常に地中海を指すという点である[27]。ところで、カミュが祖国アルジェリアを、地中海を離れ、パリに定住するようになってからの諸作品、とりわけ後期作品においては、海が常に地中海を指すとは限らなくなってくる。とともに、カミュの作品世界における海は微妙に変奏を奏でるようになる。この問題については、稿を改めて、考究したい。

注

『異邦人』*L'Etranger* の邦訳は、『異邦人』（窪田啓作訳、新潮文庫）からほとんどそのままの形で借用したことをお断りしておく。また、『異邦人』からの引用については直接ページを示したが、それらはすべてプレイヤッド版（*Théâtre, Récits, Nouvelles*, Gallimard, 1962, dépôt légal 1967）のページを指している。

1）Carl A. Viggiani, *L'Etranger de Camus* in *Configuration critique d'Albert Camus* I, Lettres Modernes, 1961, p. 120. 言うまでもないが、この引用ならびに注2）注5）にあげた引用は、単に『異邦人』に関するものではなくて、カミュの全作品に対するものである。

2）*Ibid.*, p. 122.

3）《Le monde, la douleur, la terre, la mère, les hommes, le désert, l'honneur, la

misère, l'été, la mer.》(Albert Camus, *Carnets* III, Gallimard, 1989, p. 15.)

4）Jean Onimus, *Camus*, Desclée de Brouwer, 《Les Ecrivains devant Dieu》, 1965, p. 15.

5）Viggiani, *op. cit.*, p. 120.

6）「カミュ『異邦人』——不条理ゆえに生きる——」（戸田吉信編、『ヨーロッパを語る13の書物』所収、勁草書房、1989）、「『異邦人』における太陽の image」（広島女学院大学論集　通巻35集、1985）、「カミュとスタンダール——『異邦人』と『赤と黒』をめぐって——」（広島女学院大学論集　通巻39集、1989）、「『異邦人』の＜小柄な機械人形＞について」（広島女学院大学論集　通巻37集、1987）など。

7）M.-G. Barrier, *L'Art du récit dans L'Etranger d'Albert Camus*, Nizet, 1966, p. 104 参照。もっとも、スプリッスラーの『アルベール・カミュ　コンコルダンス』（小説篇）では、使用数は微妙に異なっている。参考までに異同箇所のみあげると、スプリッスラーでは、「水」20回、「目」20回、「音」15回（単数形で11回、複数形で4回）、「夕べ」13回（単数形で12回、複数形で1回）、「光」10回（単数形で8回、複数形で2回）となっている。Manfred Sprissler, *Albert Camus Konkordanz zu den Romanen und Erzählungen*, Georg Olms, 1988 参照。

8）拙稿、「『異邦人』における太陽の image」、前掲書、参照。

9）20例中、16例が「海の水」を指している。

10）《Pendant que je me rasais, je me suis demandé ce que j'allais faire et j'ai décidé d'aller me baigner.》(p. 1138)

11）《Nous n'avons pas mangé parce que nous voulions nous baigner tôt.》(p. 1160)

12）それに対し、引用文が示すように、マリーはすぐに水に飛び込んでしまう。

13）たとえば、精神分析学的立場に立つジャン・ガッサンは、「海」に「母親のイマーゴ」(l'imago maternelle) をみ、さらには「音声の類似性」からも、「海」と「母」を結びつけているし（Jean Gassin, *L'Univers symbolique d'Albert Camus*, Minard, 1981, pp. 37-39 参照）、またロラン・マイヨ（Laurent Mailhot, *Albert Camus ou l'imagination du désert*, Les Presses de l'Université de Montréal, 1973, pp. 32-34 参照）やモルヴァン・ルベスク（Morvan Lebesque, *Camus par lui-même*, Seuil, 《Ecrivains de toujours》, 1970, p. 16 参照）なども「海」と「母」の結びつきを指摘している。ジャン・グルニエも「アルベール・カミュの著作において＜海＞という言葉は、実際に、母、マリー、マルタ、死の上に被いかぶさっている」と述べているが、グルニエの証言によれば、この解釈は「カミュを面白がらせたが、カミュはそれには賛成しなかった」そうである（Jean Grenier, *Albert Camus*, Gallimard, 1968, p. 147

参照)。

14) マリーにとっても同様である。

15) ミシェル・ムジュノも次のように指摘している。《La mer est liée à la présence de Marie. [...] Jamais Meursault ne va se baigner sans Marie.》(Michel Mougenot, *L'Etranger*, Bertrand-Lacoste, 《Parcours de lecture》, 1988, p. 25.)

16) パンゴーは「海」は「一般にマリーと結びつき、それゆえ快楽と結びつく」(associée généralement à Marie, donc au plaisir) と述べている。Bernard Pingaud, *L'Etranger de Camus*, Hachette, 《Poche critique》, 1971, p. 72.

17) もっとも、3章・4章にはそれぞれ一日のことしか描かれてはいない。

18) 第Ⅰ部で多用されていた「太陽」「水」「海」は、第Ⅱ部になると極端に少なくなり、「太陽」は6例、「水」「海」はそれぞれ2例、見つかるだけである。しかしながら、後に例示するように、「海」の2例はきわめて効果的と言わねばならない。

19) 海が「自由」の象徴だとはよく言われることである。たとえば、エリザベート・ヴァンサンは次のように指摘している。《Dans la deuxième partie du roman, la mer est étroitement liée au rêve de liberté.》(Elisabeth Vincent, *L'Etranger*, Bordas, 《L'Œuvre au clair》, 1990, p. 64.) また、マリーにとっても、「水浴」(=海) は「自由（な世界)」を意味するものとなる。《Elle [=Marie] a dit [...] que je serais acquitté et qu'on prendrait encore des bains.》(p. 1179)

20) マリーが面会に来た日、ムルソーは「格子にしがみついて、顔を光の方へ突き出して」(p. 1177) いたのだから、海を見ていたと推測される。

21) この件に関し、カリナ・ガドゥレックは次のように指摘している。《Après la condamnation, on a changé Meursault de cellule. La mer, symbole de la liberté qu'il voyait de l'autre cellule, a disparu. Ici, il voit le ciel et ne voit que lui.》(Carina Gadourek, *Les Innocents et les coupables*, Mouton, 1963, p. 66.)

22) その他の例をあげておく。《Pour moi, c'était sans cesse le même jour qui déferlait dans ma cellule et la même tâche que je poursuivais.》(p. 1183) 《[...] tout devenait comme une eau incolore où je trouvais le vertige.》(p. 1199) 《[...] un flot de joie empoisonnée me montait au cœur.》(p. 1203)

23)「再生」の決意は、母の想起によるものであり、この意味で、「海」と「母」は結びついてはいる。

24) 拙稿、「『異邦人』における太陽の image」、前掲書、参照。

25) 我々の解釈とは異なるが、ヴィジアニは「海」を「運命」とも捉え、「海」を「死の手先（のようなもの)」としている。《La mer, le soleil et le hasard constituent en

effet pour lui [=l'auteur] l'équivalent du destin grec. Bref, on pourrait dire que c'est l'irrésistible fascination de la mer qui attire Meursault sur la grève où il rencontre Marie Cardona et où, sous l'effet de la chaleur et de la lumière violentes du soleil, il tue l'Arabe. La mer n'est donc pas comme il pourrait sembler au premier abord simple symbole de liberté ou de résurrection: c'est aussi un instrument de mort. Que Marie et Meursault se soient rencontrés sur la grève le lendemain des funérailles de la Mère est l'un des faits qui étayent la condamnation à mort de Meursault.》(Viggiani, *op. cit.*, p. 126.)

26)「死」のイメージが覆い被さっている浜辺での散歩の場面には、しかしながら、多くの研究者が「楽園」(paradis) と形容した「砂地を流れている小さな泉」(p. 1165) が描かれていたことも見落としてはなるまい (Carina Gadourek, *op. cit.*, p. 59, Lionel Cohn, *La Nature et l'homme dans l'œuvre d'Albert Camus et dans la pensée de Teilhard de Chardin*, L'Age d'homme, 1975, p. 24、ならびに Paul Lécollier, *Albert Camus*, Hatier,《Thema/Anthologie》, 1974, p. 32 参照)。しかもヴァリアントでは、上にあげた一節に「海の方へ」(p. 1923 参照) という言葉が添えられていたのである。

27) 本稿では対象を『異邦人』に限定したため、具体的には検証しなかったが、『誤解』においても『カリギュラ』においても、「海」は地中海を指している。

L'image de la mer dans *L'Etranger*

Yosei MATSUMOTO

La mer dans *L'Etranger* nous montre d'abord l'image de la vie. Le héros Meursault aime beaucoup se baigner et il épuise le plaisir de la vie que la mer lui donne. Dans cette œuvre, la mer a aussi une dimension féminine et sexuelle. Il est remarquable en effet que ce soit dans l'eau que Meursault retrouve Marie, sa future amie. La partie de nage qu'ils font ensemble l'un contre l'autre et leurs embrassements dans la mer sont le prélude de leur amour. La mer reflète aussi l'image de la liberté. Au début de sa détention, Meursault garde toujours des pensées d'homme libre et il en cite pour exemple le fait qu'il ait envie《d'être sur une plage et de descendre vers la mer》. La mer est ainsi pour lui le symbole de la liberté. Ajoutons en passant qu'après sa révolte contre l'aumonier,《la merveilleuse paix》qui remplit de bonheur le cœur de Meursault entre en lui《comme une marée》.

L'image de la mer nous présente donc celle de la vie, mais on ne doit pas en oublier un autre aspect, quoique celui-ci soit beaucoup plus effacé. Dans la scène du meurtre qui se déroule sur la plage dominée totalement par le soleil, symbole du monde absurde, la mer devient un élément qui pousse inévitablement au meurtre notre héros impuissant et passif. Nous entrevoyons ici l'image de la mort qui ne contraste d'ailleurs pas si nettement que cela avec celle de la vie, comme l'image du soleil le fait bien ressortir dans cette œuvre.

Il faut remarquer enfin que la mer dans *L'Etranger*, ainsi que dans les autres ouvrages du cycle de l'absurde (*Le Malentendu* et *Caligula*), n'est

autre que la Méditerrannée et que l'image de la mer sera forcée de subir des modifications dans les ouvrages postérieurs.